関西自然保護機構会報（16）41－46，1988

Nam Choan ダム：タイの自然保護運動

神崎　護
（大阪市立大学理学部植物生態）

1．Nam Choan ダムとは

1987年10月から翌年1月までタイに滞在中，Nam Choan ダムに対する反対運動がバンコクを中心に盛んに行われていた。このダム建設に対する予備調査費の一部が日本の海外経済協力基金から提供されているというので，反対運動に参加する学生からいくつかの文献を見せられたのが，この問題に首を突っ込むきっかけであった。

このダムは，ビルマ国境に近いカンチャナブリ県からタク県にかけて計画されているもので，完成後に出来るダム湖が生物保護区や国立公園に与える影響を憂慮する科学者・環境保護論者や，農業用水の減少を危ぐする農民の強い反対を巻き起こしている。現在，バンコクの主要大学の教官学生，王室林野局職員等の多くも反対派に属している。1月末，私が帰国する直前の情報では，建設問題に対してその可否を決定すべき委員会は，反対運動の成り行きを見極めるためか，その決定を数回にわたり引き延ばしているとのことであった。残念ながら筆者自身で，このダムの建設予定地を訪れることが出来なかったが，この問題は開発途上国の自然保護運動や，日本の海外援助が相手国でどの様な問題を引き起こしているかを考える上で，1つの貴重なケースと思われたので，ここにその概略を報告したい。なお，本文中に引用した文献は，カセサート大学大学院に留学中の Harry Wood 氏から提供された。同氏の好意に感謝する。

2．ダム建設計画

タイでは，国内の電力需要をまかなうために，Electricity Generating Authority of Thailand（EGAT）という政府機関が中心となって1969年以来ダム建設の計画策定とダムの運用に従事してきた。発電能力535MW のプミポンダム，375MW のシリキットダムを初めとして，ここ20年の間に大型のダム建設が進み，現在では電力供給の22%をカバーするまでになった（Arbhabhirama et al.，1987）。問題になっている Nam Choan ダムは1978年から調査が始まり、1981年 EGAT から建設計画が政府に提出されたもので，発電能力580MW，ダム湖の面積が137平方キロメータ（223平方キロメータという記述もある；Hirsch，1987）にもおよぶ大規模なものである。ダムの発電能力は，日本で最大の発電能力（揚水式発電所を除く）を持つ田子倉ダム（380 MW）の1.5倍，ダム湖面積は琵琶湖の5分の1ということから，このダムの巨大さが想像できる。

ダムは Mae Klong 川上流の Quae Yai 川（映画「戦場に架ける橋」で有名なクワイ川）に計画されている。この水系には既に Srinakarin ダムと Khao Laem ダムが完成しており，Nam Choan ダムは Srinakarin ダムの上流135kmの地点に建設が予定されている。

関西自然保護機構業績第61号

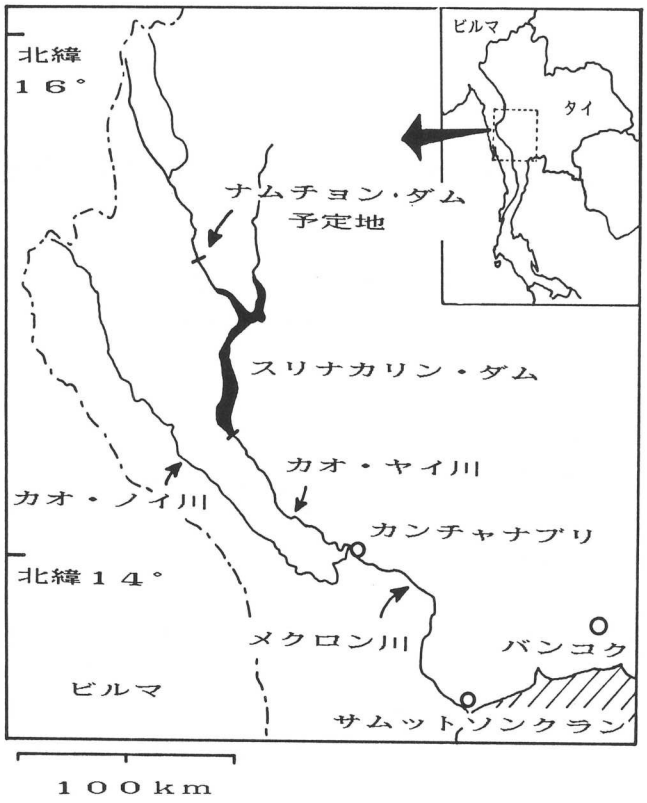


図1．ナムチョン・ダム建設予定地

3．Nam Choan ダムによる影響

ダム建設に関する環境アセスメントの結果を，1980年にEGATがレポートしてまとめているが（EGAT，1980），反対派は，このアセスメントが森林や野生動物にあたえる影響を過小評価しており，実際のダム建設による自然破壊はこのレポートで報告されているよりも極めて大きいことを強調している。

1）植生

ダム建設予定地は，Thung Yai Naresuan 野生生物保護区（3200㎢）の中に位置し，周囲には，Huai Kha Khaeng 野生生物保護区（1631㎢），Kroeng Kavia（512㎢）禁猟区，Srinakarin 国立公園（1532㎢）が隣接しており，開発の手がいまだ及んでいない広大な森林が残存している。タイでは，この20年間の間に国土面積に対する森林の比率が50%から30%へと急速に減少しているが，昨年王室林野局で作成された植生図によれば，上述の生物保護区一帯はタイで最も森林が保存されている部分で，生物保護区としての価値は，タイのみでなく東南アジア全体にとってきわめて貴重なものとなっている。

2）野生動物

この様な広大な森林に護られて，他の地域では絶滅してしまった野生動物が多数生息している。ほ乳類では29科64属81種，鳥類では53科219属415種の存在が報告されておりこの中には，スマトラサイ（*Dicerorhinus sumatraensis*），ジャワサイ（*Rhinoceros sondaicus*），アジアスイギュウ（*Bubalus bubalis*），スマトラカモシカ（*Capricornis sumatraensis*），ホッグジカ（*Cervus*

porcinus），マクジャク（*Pavo muticus*），ナナミゾサイチョウ（*Aceros nipalensis*），ハジロモリガモ（*Cairina scutulata*）などの絶滅の危険性が大きいため，保護鳥獣などに指定されている動物も含まれている（Phumpakkapan and Kutintara，1987）。しかし上述のEGATレポートによって報告されたほ乳類の種数は，半数の41種にしか過ぎず，調査内容の不備が指摘されている。またこの影響評価でもっとも致命的なミスとして反対派に指摘されているのは，生息域の分断孤立化による野生動物の個体群サイズの減少と，絶滅の危険性の増大について全く触れていないことである。

3）付随して生じる森林破壊

ダム建設による影響は，ダム湖によって直接水没する地域だけに限らない。先に述べたダム湖による生息域の分断はその一例であるが，ダム建設にともなう道路網の整備も，この地域の現状に深刻な変化をもたらすことが予想されている。現在この地域では山岳小数民族（モン族とカレン族）が移動焼き畑耕作を細々と行っているが，この地域に建設資材運搬に耐えうるような整備された道路が建設されれば，低地で土地を求める農民が大挙してこの地域に移住し焼き畑耕作を開始するのは十分予想できる。事実1978年にSrinakarinダムが完成した後，周囲のSrinakarin国立公園内に多数の農民が流入し焼き畑を開始したために，森林の破壊が進行しているという現地の林学者の話であった。現在タイでは，人口の増加にともない農地の不足が深刻化している。この様な農民の流入を力で抑えることは，現政権にたいする農民の反発を招くため，ほとんど不可能と考えられる。またこの地域の森林は，タイの主要な高級材樹種のひとつであるチーク（*Tectona grandis*）や（Mahaphol，1954），ビルマカリン（*Pterocarpus macrocarpus*），*Afzelia xylocarpa*等の有用樹種を産出する混合落葉林であり，道路網の整備はこれら有用樹種の伐採搬出の引金になることは明らかである。

4）水資源

Nam Choanダムは多目的ダムとして計画されているが，ダムの灌漑・洪水調節機能は疑問視されている。その根拠の一つとなっているのは1980年にMae Klong川で起きた農業用水の枯渇である。この年，少ない雨量に加えて，新たに出来たSrinakarindダムに水を取られたため，Mae Klong川の水量が減少，河川水の塩性化を引き起こし，下流のサムット・ソンクラン県のココナッツ農園に深刻な打撃を与えた（Hirsch，1987）。また逆に豪雨時に危険水量を越えたために下流へ水を放出し，洪水をもたらした例が，東北部のUbonratダムで記録されている。

5）ダム崩壊の危険

建設されるダム自体の崩壊も懸念されている。タイ・ビルマ国境付近には，北西―南東方向にのびる活断層が分布し，かなり高い頻度で地震が記録されている。すでに建設されたSrinakarinダム周辺では，このダム湖自体の重量が活断層に影響をあたえて発生したと考えられる群発地震が，1980年から記録されており，とくに1983年4月の地震ではダム湖周囲の斜面での地すべりと津波が発生した。新たに計画されているNam Choanダムの建設予定地の直下には，Srisawat断層があり，もし地震が発生すればダム自体の決壊につながる可能性が大きいと指摘されている（Nutalaya，1987）。もし，このような崩壊が起きた場合カンチャナブリ周辺での水位上昇は5mと予測されており，人的経済的被害は甚大なものとなる（Nutalaya，1987）。

6）考古学的遺跡

さらに，アセスメント調査の際に水没予定地域内から新石器時代の穴居跡が発見され，1980年のタイ芸術大学，1982年のマヒドール大学による調査でも考古学的に貴重な遺跡が多数発見され

た。その中には，１万年以上前のものと推定される石器もふくまれていた（Karnchanakom, 1987)。

4．反対運動の経緯

1981年この計画が発表されてからの反対運動の経緯を文献から探ってみると，およそ以下のとおりである。

1982年，ダム建設予定地にEGATが不法に建設していた道路にたいして，野生生物保護委員会（Wildlife Conservation Committee）がクレームを付けたのが引金になり，マヒドール大学，カセサート大学，タマサート大学，王室林野局，野生生物基金，野生生物保護協会，地元カンチャナブリの自然保護団体等が中心となり反対キャンペーンが始まった。この年の９月に行われたNam Choanダム問題を討議する閣議には，反対派を代表する２名の研究者が招かれた。その証言が効果をそうし，内閣は専門委員会の設置と慎重な検討を続けることを決定した。このため，EGATが当初計画していた1983年度着工の予定は挫折した。

しかし，４年後の1986年，上記の委員会は，この計画の改善と再研究を内閣に進言し再び論争を引き起こすことになった。筆者が滞在していたのはちょうど委員会が最終決定を出すと言われていた時期で，活発な反対運動が繰り広げられている最中であった。1987年12月には，反対派学生による自転車パレードがバンコク市内で行われ，新聞の反対キャンペーンも盛んに行われていた。上記の委員会は，筆者が帰国した１月31日の時点ではまだ最終決定を公表するには至っていなかった。

Nam Choanダムに反対する運動は単にこのダムだけの問題に留まらず，最近20年間に進められてきた大型ダム建設の政策に対する国民の不信に根ざしているように思われる。ダム建設によって引き起こされたサムット・ソンクランでの塩性水による被害，さらにSrinakarinダム付近を震源地とする群発地震など，付近の住民には悪影響だけが及び，ダムの建設によって恩恵を受けるのは，バンコクを中心とする大都市の工業関係者やダム建設関係者だけではないかという反感が，Mae Klong川流域の住民にはあるようだ。

5．日本の海外援助との関連

タイでのダム建設には，日本も大きく関与している。今回のNam Choanダムの場合にも調査研究費の３分の２は，海外経済協力基金からの援助によってまかなわれており（Hirsch, 1987)，またダム建設が決定した場合の建設資金も同基金による援助が予定されているようである。また実際の建設にあたっては，日本の建設会社が技術協力することになるのは今までのダム建設の例からみればあきらかであり，日本はこの問題に深く関わっている。

6．日本の自然保護運動のあり方

筆者自身，日本の海外援助が実際に相手国でどの様な社会的影響を与えているのかを十分に考えたことはなかった。しかし今回の体験から，日本が経済協力の相手国の経済や，政治，社会全体に強い影響力を持つことを，僅かながらではあるが体験することが出来た。実際我々が海外援助に対してもつイメージは，ほとんどが海外協力事業団，政府，実際に海外で技術協力に従事する企業の広報活動によって形成されており，マイナス・イメージは極力ぬぐい去られているように思われる。近年，海外協力事業団の乱脈会計や，援助物資が相手国で有効に機能していない実

態などがマスコミを騒がすようになったが，海外協力の相手国に与える影響を長期に渡って調査検討するような，なんらかの機構が必要だろう。また自然保護団体も国内の問題だけに縛られることなく，日本の海外援助がもたらす自然破壊に付いても積極的に情報を集め，行動することがより一層望まれるだろう。

また今回のタイでの体験から自然保護問題に対する自分の取り組みについて考えさせられるところがあった。日本でも知床の原生林伐採問題，秋田・青森県境の白神山地のブナ林保護問題，三宅島の米軍訓練場建設問題，石垣島の空港建設にともなう珊瑚礁の保護問題等，大きな問題を抱えている。しかし，研究者として自分自身どの程度真剣にこれらの問題に取り組んでいるだろうかと自問せざる得なかった。

タイでは，1976年のクーデターにより文民内閣が倒されて以来10年以上に渡り，軍事政権が続いている。このような中で人々の民主化を求める声は強く，今回のダム建設に対する運動にも，民主化要求の願いがこもっているような気がする。それほどまでに現地で反対運動に参加する人々の活動は印象的であった。ひるがえって日本の現状をみた時，民主主義を標榜する国での自然保護と胸を張って言えるだろうかと，考えた次第である。

付記　本稿脱稿後バンコクのHarry Wood氏より手紙をもらった。それによると，1988年3月18日，政府の委員会はナムチョンダム建設計画を無期延期するとの決定を下したそうである。当面の建設阻止には成功したものの，この決定は，いつでも建設再開に取りかかれることを意味しているため，反対派は今後も粘り強い活動を強いられることになりそうである。

Abstract

Nam Choan Dam : An Nature Conservation Campaign in Thailand Mamoru Kanzaki
(Osaka City University, Sumiyosi, Osaka 558)

This article aims to introduce the people's campaign against the construction project of Nam Choan Dam (the dam lake will cover more than 137 square kilometers) in Thailand.

Botanists and foresters in Thailand are opposed to the project because the dam is planned at the center of natural reserves and a national park located in Kantchanaburi and Tak province,Western Thailand. The area is covered with forest which is the largest fragment of the tropical seasonal forest in Southeast Asia. The dam and roads construction will accelerate the immigration of the shifting cultivator into the natural reserve area and disturbance to the natural forests. Zoologists are claiming that the area is the final sanctuary for mammal and birds which are threatened with extinction in Southeast Asia. The dam lake and associated roads will cause the fragmentation of the habitats and populations of the rare animals. Farmers in Kantchanaburi are afraid that the dam deplete the water for irrigation because the government has given the first priority to the generation of electric power. Geologists are warning that the dam situated on a active fault and will bring on earthquakes and the collapse of itself.

The preliminary survey for the construction of the dam was supported by Japanese government through the Japanese Overseas Economic Cooperation Fund (OECF) and if the project

starts more than half of the budget will be supported by OECF.

We Japanese have a duty to paying attention to the influences of our overseas aid on the environmental problems of developing countries.

参　考　文　献

Arbhabhirama, A. et al. 1987. Thailand, Natural Resources Profile. Sangdad Publication, Bangkok.

Electricity Generating Authority of Thailand. 1980. Upper Quae Yai Project. Environmental and Ecological Investigation, Final Report Volume II : Main Report. EGAT.

Hirsch, P. 1987. Social Implications of Nam Choan Dam, Thailand. Not published.

Karnchanakom, P. 1987. Nam choan dam and archeological losses. In : P. Sribhibhadh et al. (ed.) CONSIDER THE COSTS—A Position Paper on The Nam Choan Dam, pp.24—25, Wildlife Fund Thailand, Bangkok.

Mahaphol, S. 1954. Teak in Thailand. Royal Forest Department Thailand, No. R. 16.

Nutalaya, P. 1987. Earthquakes and the Nam Choan Dam. In : P. Sribhibhadh et al. (ed.) CONSIDER THE COSTS—A Position Paper on The Nam Choan Dam, pp. 11—20, Wildlife Fund Thailand, Bangkok.

Phumpakkapan, N. and U. Kutintara 1987. The wild fauna of Thung Yai and Huay Kha Khaeng Wildlife Sanctuaries, West—central Thailand. Faculty of Forestry, Kasetsart University.